

「狩野の一語一語が、ツキリ／＼と腹を斬るやうに響く。」

「じゃ、君、如何すれば可いんだ」と、僕は實に絶るような思で言つた。

「然う言はれると僕も困まるがね、實は僕自身が此の問題で苦しんで居るんだから――」

「何せよ、君、尋常なことでは可けない、どうしても死な／＼けりや可けない、死んで復活らなけりや駄目だ、お互に骨髓から罪に染まつて居るんだものね」

狩野はホツと溜息を吐いた、僕は胸中に只だ黒雲が渦巻くを覺えて、掻き撓つて仕舞

いたいように焦立つ、

「今少こし、君、解るやうに話して呉れ給へ」と僕は言つた。

「君に向て斯様こと言ふのは、高慢痴癡に見えて可けないがね、僕は常に然う思つて居るのだ、僕等は實に何百代何千年と言ふこと知れぬ長き間、罪に生まれ、罪に育ら

罪を誇り、罪に死んで來て居るのだ、早い話が、君にした所で、武士の家に生まれて

來たんだらう、君は議論の上でこそ、四民平等を唱へたり、世界同胞を唱へたり、武

士道の階級的精神を攻撃したりするけれども、臟腑の奥は少こしも變はらぬ権力主義だ

よ、僕だつても然うだ、成程僕は農民の子だ、けれども代々名主を勤めたとか、庄屋

を勤めたとか、清和源氏の末流だとか、系圖を誇り權威を誇る血液を受け、同じ乳に

養はれた骸だらう、だから學校時代に、君が社會主義の書物を読んで來ては切りに「

労働の神聖」を振り播く、が、僕は反對した、力を勞するよりも心を勞する方が高尚

だと言ふ信仰だつたのだ、君は政治的改草が男兒の本願だと言ふ、僕は政治的事業な

んと言ふものは、一時的のことで瞬く間に歴史の幕に掩はれて仕舞ふ、永遠の事業は

文藝だ、一篇の詩、以て永しへに美神の顔を樂しませることが出来るなんて威張つた

が、考ると實に死んで仕舞いたくなるね、君、僕の一月の學費を供給する爲めに、小

作人が何百萬粒の汗を絞つたと思ふか、其れを考ると、僕は能くまわ血へドも吐か

ず生き居たと、不思議に思ふよ、――「神は碎けたる靈魂を受け給へ」と、僕は唯だ

一九三

是れだと思ふ。」

僕は狩野の話を、夢のように聞いた居た、其れが何時か儘に見たことのある古き夢を繰返へされるようで、何處にか腹の底に應える所があるように感じる。

「成程、成程」と僕は熟と聴いて居る。

「本當に手に持てる一切を棄て、仕舞はなくては駄目だ。學問だの、智識だの、凡て我手の技巧を誇つて、進歩だの改革だのと、勝手な小細工に浮身をヤツすのは、如何しても間違つて居る、故郷の門は君の直ぐ前に立つて居るのだ、が、君の眼は人の智慧で包まれて居り、君の手は己の作品で塞がつて居る、其れでは假令門の鍵が、君の鼻先にブラ下がつて居たにせよ、君は如何することも出来なからうじや無いか。」

狩野はヂツと僕の面を見て居たが「君に故郷と云ふ觀念が無いのは、僕から見れば實に大なる恩寵だ、古來大思想家だの、大宗教家だのと云ふ連中でも、皆な此の故郷とか祖國とか云ふ小感情に制へられて、自由自在に伸びることが出来なくて、中途半片

で萎縮して居る、人は何の爲めに苦心するか、要するに此の故郷だの、祖國だのと云ふ小さいな牢獄を脱けて、直に世界人類と云ふ生命と一致したい爲めじや無いかね、

事業を見るから可けない、事業には功名が伴ふ、多勢を要する、黨派を要する、權力が立つ、是れが人生の禍亂だ、歴史は此の禍亂の蒸返しだ、進歩でも改革でも何でも無い、無神論だの、何々主義だのと云ふ小智慧に縛られて、君は傲慢と云ふ大馬鹿者になつて居るのだ、乞食は可いよ、乞食は可いよ、本當に素裸になり給へ、君の戀ひ慕つて居る故郷は歡んで君を迎へて呉れる、君は其處に父君をも見るだらう、母君をも見るだらう、父の父、母の母を見ることが出来るに相違無い、其時、振り返つて僕を憐んで呉れ給え、僕の故郷は草の葉裏の莖のようなものだ、君のは今夜の月のようなものだ」

あゝ久振で放論したと、狩野は快澗にハ、ハ、と笑つた、

僕は恰も革鞭で打たれた罪人のように、肉の痛むのを覺ゆるのである。

「考えて見ると、民心の變化は早いものだ」と狩野は言ふ。「君が教場で勞働神樂論を唱えた頃には、君も議論として唱えたのであり、世間も議論として相和すると云ふ調子であつたが、如何だね、今日では最早口頭の議論じや無い、直に靈魂生死の活問題となつたじや無いか、此の山の中の空気を其の音響を傳えて居るが——」

「僕は何時でも口頭の議論のみで、面目ないよ」と僕は頭を垂れた。  
 ぶら／＼と庭を歩きながら、狩野は此の學校の歴史を語つた、學校の前身は眞言宗の寺で、近郷近村に澤山の檀家を持つて居たが、明治維新の頃住職に一人の惡僧が居た檀家の葬式を當て込んで脅迫をする、田を何畝寄進しなければ用いをして遣らないの、山を何反寄附しなければ經を誦むことが出来ないと言ふ、棺桶を据えて置いての談判だから仕方が無い、斯う云ふ風にして寺の財産がメキ／＼と殖えた、金を貸しては高利を絞る、二三里隔てた村に尼寺があつたが、其處の尼さんが小金を蓄めて居ることを知つたので、遂に誘惑して金を捲き上げた上、殺して仕舞つた、が、種々の

惡事が露見して入獄の身となり、半死して仕舞つたと云ふのである、斯様ことで無住の空寺になつて居たので、村の有志が贖金して私立の英語學校を開いた、随分突飛な話である、狩野も初め英語を習ひに來た、狩野が入學すると間もなく、英語學校を廢して普通の小學校になつて仕舞つたが、今になつて考へると、彼の時の英語の先生と云ふのは、耶穌教に相違無かつた、未だ耶穌教を口に出して言へない頃であつたので黙つて居たのであらうが、慥に篤實な耶穌教信者であつたに相違無いと狩野は語つた。「人は麵包のみにて活きるものに非ず」と言ふ言葉を教へて呉れたのは、實に此の先生であつたと、狩野は話した。  
 「君、此の庭で、百姓の娘にテニスなど演らして嬉しがつて居るんだもの、呆れ返へるよ」と狩野は言つた、

第十七

其れから僕は、石崖の上の柵に身を凭せて、戀愛に關する狩野の感想を聴いた、彼は切りに都會の戀の悲惨を説いた、都會には神の愛が無い、「自然」の生命が無い、神を忘れ自然を離れた都會は、虚偽の技巧を弄んで其れを誇として居る、で、戀愛の如きも全く玩弄品となつて居ると云ふのが、狩野の議論だ、彼は自らお雪さん問題を持ち出した、彼はお雪さんに依りて嘗めたる初恋の甘味は、所詮生涯忘れ得るもので無いことを説いた、「お雪さん」は今日でも決して彼に取て不愉快の名前では無い、彼は只だお雪さんが何時までも戀を玩弄することに耽つて、遂に其の深き靈氣に觸れること無しに滅亡する外ないことを悲むと、熱心に論じた、

彼は君代さんに就ても深き同情を持つて居る「姉なぞも然うだよ、彼女は結婚した、が、戀愛は知らない、彼女も戀愛を知らずに終つて仕舞ふ悲惨黨の一人だ」と言ふて居た、

僕が『無經驗』の一語で、彼の戀愛論に應えたことが、頗る彼の感觸を害した、

『無經驗々々と君は言ふが、成程、君は僕等のように人目に立つような騒ぎをしたことは無いにせよ、心の經驗も無いと言ふことは出来なからう』と、真面目になつて僕の顔を見た、僕の心は戀愛問題よりも、我が身の行方と云ふことに傾注されて、胸中大擾亂、頭は熱し、耳は鳴ると云ふ場合であつたが、其の凝視た狩野の眼色に僕は覺えずギョツとして驚いた、

『古いことは知らないが、最も近き證據を僕は握つて居る』と狩野は言ふ「才六——否や、濱さん、あの濱さんに對して君は何と思ふて居るね」

『何と思ふ？——別段何とも思ふて居ない』と僕は言ふたが、舌は極めて重もかつた『其様こと言ふから可けない、君は其様虚偽を言ふから可けない、假令如何に否認しても君の眼に書いてあるから仕方が無い』と、如何にも僕の腹の奥を一字一句讀み抜くような眼で見つめる『僕は此の間、濱さんの心をも讀んで來た、さすがに商賣人だ何食はぬ顔して居たけれど、僕が「石田君」「石田君」と君の名を言ふ毎に、彼女の心

臟に騒ぐ波瀾が、筋肉に、血管に直ぐ應えるのが見えるだろうじや無いか、——  
君の非戀愛論も久しいものだが、君の議論は、必竟戀愛の玩弄と云ふ文明の罪惡に對する反抗に過ぎないよ、如何だね、君」  
デロリ〜と見入る、

「然うかも知れない」と、僕はニヤリと無理に笑つたが、冷たい汗が背中に一杯であつた。

月は次第に傾く、夜は益々寒い、僕等は歸途に就いた。

「面白い騒動があつてね」と、狩野は先きに立つて、ミキリ〜と歩みながら笑つた  
「御承知の通り、妹の養子問題が起つて居るんだらう、」

『うむ』

「此の問題に一番氣を病んで居るのが姉だね、是れは餘程可哀そうな事情があるのだ  
若し僕が相續するのなら、姉は僕を與みし易さ好人物と踏んで居るんだから、何の心

配も無いが、妹は彼の通りの氣質なので、姉でも兄でも容赦なく凌駕しようと思つた勢だ、其處で養子の人物によりては、姉と云ふものは全く妹等夫婦の厄介物になつて仕舞はにやならぬだらう、姉の性質として逆も堪え得る所で無い、其處で姉は養子の撰擇に苦心をして居たのだ、親父は又た姉の言ふことだと奇妙に納得するんでね、所で君、其の候補者が見當つたのだ」

「然うか、其りや、誠にお目出たいじや無いか」

「然うさ、其の候補者先生が承諾して呉れさへすれば、お目出たいだらうがね」

「如何云ふ人物なんだ」

「人物か」と言つたまゝで、五六歩進んだが、クルリと狩野は振返つて「君さ」と云ふ、

「冗談言ふな」と僕は笑つた、

「否や、本當の話さ」と眞面目に云ふ「此の間、姉が僕を呼んで、石田さんを鶴代の

婿に如何だろうと言ふのさ、然うすれば僕との間も平和に行つて萬事都合だから、是非然うしたいと熱心な相談さ、何せよ、君に對する姉の信任と云ふものは非常なものだ、そして僕には是非君を説き落とせと言ふのだ、僕も閉口したよ、と言つて、姉が餘り熱心なので、頭から駄目ですと言ふわけにもならず、じや、僕も折を見て言ふて見るが、僕は餘り心易過ぎて却て話がし悪いから、姉さんから當つて見たら可いでせうと言ふて別れたのだ、姉は君に話したと言ふじや無いか」

「然う言はれれば、成程、姉さんから話があつた」

「君は養子に來ても可いと言ふたそうじや無いか」

「姉さんは座輿のように言ひなすつたから、其れで僕も冗談に返事したのだ」

「何だか知らないが、姉が大恐悦さ、石田さんは決して厭では無い様子だ、今度は妹を承諾させるのだと云ふのでね」

「本當に、君、冗談じや無いよ」

「さあ黙つて聽き給え、妹を呼んで話をしたんだ」と言つて、又た五六歩黙つて歩く、

「恐ろしい妹の肘鐵砲さ、可いかね、君、新聞記者なんて下等な人物は厭ですツて言ふんだ、前橋あたりで新聞記者と言へば、脅迫詐欺と同一に見られて居ると云ふ論法だ、姉は切りに田舎の新聞記者と東京のと同じに見ることに間違、新聞記者が社會上の地位の實に尊いことなど諄々と説いて聽かせたが、妹は頑として承知しない、更に君の人身攻撃を始めました」

「人身攻撃？」

「妹も矢張君の新聞を読んで居るので、君の非戀愛論を引つ張つて來ての攻撃さ、婦人の生命の戀愛を排斥するような人は、品性の下劣な人に相違無いと云ふ大氣焔だ、姉は一生懸命になつて君を辯護するのさ、品性の下劣だなんて失敬だと云ふので盛に君の學識人格の優れて居ることを稱揚する、所が駄目だ、段々に聲が荒くなる、母は

僕に行つて止めさせよと言ふたが、最早お仕舞だろうと言つて黙つて居ると、到頭喧嘩だ、「其様に良い人なら、姉さん自分でお貰いなすつたら可いでせう」と言ふ棄てせりフで、妹は襖を手荒く開けて出て行つて仕舞ふ、姉も次で出て来たが、火のように怒つて物も言へないと云ふ始末だ、僕も、君、實に困らせられたせ」

「然うか、僕の一言の過失で、飛んだ迷惑を掛けだね」と言つたが、僕は何だか變な氣がした、

食

乞

「否や、姉が例の獨り呑み込みから起つた喜劇さ」と狩野は軽く笑つた、斯様談話の中に何時しか門近く到着して居た、福茶を呑むので、皆んな僕等の歸るのを待ち兼ねて居た、お母さんが昔語りをする、狩野が面白い浮世話をして笑はせる、が、鶴代さん一人はツンと澄まして、にこりともせぬ、養子問題の餘燼が未だ盛に燃えて居るものと知られた、やがて「お先さへ御免蒙ります」と軽く一禮して鶴代さんがスイと立つた、「百

乞

食

八を聞かなくて寝ると、白髪になるよ」と狩野が笑いながら言ふたが、「白髪になる方が可う御坐います」と言ひ棄て、行つて仕舞つた、「我儘にも程がある」と君代さんが眉を昂げて睨むのを、「今夜は何も言ふで無い」と、お母さんが和かに制へた、僕は狩野と無言に目を見合はせた、

### 第十八

やがて除夜の鐘が山に響いて鳴り渡る、  
元日の日は麗らかに上つた、  
僕は昨夜寝ずして考へた、  
僕は實に権力を否認して来た、功名富貴を否認して来た、戀愛を否認して来た、榮耀榮華を否認して来た、實に此世の一切を否認して来た、去らば果して是等一切を否認し得たのであるか、

否な、

僕は全く自己と云ふものを知らなかつた、自己を知るの大切と云ふことすら知らなかつた、一旦氣が着いて見ると、是れまで長き間熱烈に否認して來た世の凡ての罪は、盡く自己であつた、僕は世の空しき影を追ふて其れを斬るのに、焦つて居た、其れは實に自己の影であつた、實體は自己だ、影の黒く深く重かつたのは、此の心の底に燃ゆる罪の悍猛強烈であつた爲めだ、

僕は今夜も實に姦淫罪を犯した、狩野から、鶴代さんが僕を嫌つたことを聞いた時、僕の心は直に此の厭がる處女を捉えて、忿怒の情の燃ゆるが儘に、ある限りの殘忍暴勵を盡くして之を姦淫した、福茶の席に於ても僕の邪熱は鶴代さんの顔に復た燃え上がった、僕は絶えず之に姦淫した、鶴代さんが怒つて席を去つた時、僕の心は彼女を其の寢室まで逐ひ縋つて、強ひて之を姦淫した、僕は君代さんを姦淫した、僕は菊野さんを姦淫した、僕は濱さんを姦淫した、僕は佐世さんを嫌ひながら、考えて見ると

矢張之を姦淫して居た、小供を姦淫したこともある、老人を姦淫したこともある、馬車の上の騾れる貴女を、路傍の哀れな盲目を——其他自ら記憶せざる、忘れて仕舞つた姦淫の罪の、何程あるか、所詮算へ盡くすことの出来るもので無い

僕は又た何程窃盜罪を犯したか知れない、又た何程人を殺したとか知れない、僕は實に世界の王の死を願ふた、僕の心は幾度彼等の王宮に爆裂弾を投げたことであらう、幾等彼等の飾れる胸に七首を突きつけたことであらう、僕は憎むべきもの、死を希ふたのみでなく、恩人の死を希ふたこともある、親友の死を希ふたこともある、

あゝ、實に僕は虚言者だ、勿論絶えず他人を欺いて居た、が、他人を欺いたことよりも、自分を欺いたことの方が、其の數に於ても、其の程度に於ても、多く且つ深かつたことを疑ふことが出来ない、

あゝ、罪、罪——胸は盤石を積まれたよりも重苦くて、呼吸が窒つて仕舞ふやうだ



何か顔に障はる、が見えない、眼は厚く眼隠を當てられて見ることが出来ない、如何したらば、此の苦惱から救はれることが出来るだらう、如何したらば、此の目が明いて見ることが出来るだらう、

「あゝ、あゝ」と心の底から叫びを揚げて、彼方に寢返へり、此方に寢返へりして、此の一夜を明かして仕舞つた、

新しき人にならねばならぬと、自ら元氣付けて洗面場へ行つた、

すると、直ぐ隣りの、例の上の風呂場の中に、湯を弄ぶる音がする、僕の胸は忽ち鐘を亂打したやうに鳴り騒ぐ、一心に押し静めて楊子を使つて居ると、やがてザアと湯を流がす、衣の音がする、

戸が開いた、鶴代さんだ、濡手拭を綺麗な齒に噛へて、細帯にダランなく引いた裳を小褌を取つて、片足、廊下に踏み出したまゝ、恐はい目をして見た、僕は覺えず眞赤になつた、

「失禮」と言ひながら、鶴代さんは、すり／＼に僕の側を通りぬけて、バタリ／＼と草履の音させて鷹揚に行つて仕舞つた、白粉の香が残つた、

母家へ行つて見ると、君代さんも、鶴代さんも皆な良き衣に着替へて、キッチンとして居る、臺所へ行つて見ると、菊野さんが昨日のまゝで、鍋の火を焚いて居た、

僕は、お母さんと君代さんとの間に正客として、雑煮の餅の膳に就かねばならぬこととなつた、お母さんの隣りに鶴代さんが座つて居る、

今朝から全く新しき人になるのだぞ、と、自ら心を叱つて坐つた、外に出て見ると、只だ一夜のことではあるが、天地の色まで皆な新しくなつたよう

な気がする、

逢ふ人毎が「お目出とう御坐んす」と笑顔を交換して行く、

全く新しき人にならねばならぬと念じながら家に歸つた、そして狩野に「毒書」を貸して呉れ給へ」と頼んだ、

「聖書？」と狩野は言つた。  
「うむ。」

僕は昨夜の苦惱の中に斯様ことを考えたのである。古來宗教だの哲學だのと言ふものが、古道具屋の店頭に山のやうに積み上げられてゐる。宏大なものは佛教だとしてゐる。が、佛教とは何だ、必竟釋迦が王位を捨て、乞食になつたと云ふことぢや無いか、希臘の哲學と入釜しく言ふが、ソクラテスの秘密はプラトンやアリストテレスの手に依つて決して發かれて居ない、キニツクの乞食哲學に其の面影が稍々模寫されたりしく見える、東洋の思想を誤つたものは、實に孔子の治學者である——と云ふようなことを考えた。

僕は耶蘇教と言ふものを少しも知らない、てんで知らうと思つたことが無い、耶蘇教は世界の最も愚かなる迷信だ」と云ふ先入の獨斷がある、耶蘇教の迷信の爲めに歐羅巴が受けた損害の歴史を學んで居る、だから僕は耶蘇教を知りたいなどと思つたこ

とが無い、只だ耶蘇教を攻撃する爲めに、其の愚なるものであり、其の惡いものであることだけを知つて置く必要があると思つた、此の目的で僕は會て神學と云ふものも讀んで見た、聖書と云ふものも讀んで見た、教會の素見にも行つたことがある、が、僕には神學も聖書も教會も、徹頭徹尾其の馬鹿らしさが餘り明白過ぎて、議論の必要など何處にも無かつた、正直の所僕には宣教師だの、牧師だの、信者だのと云ふものの心が、不思議で滑稽で堪まらなかつた、が、其れが近來餘程動きかけて居たのである、現に昨夜も學校の庭で狩野の話をして居る時、切りに心の渴くのを感じた、耶蘇と云ふ奴は一體如何云ふ男であつたらうと云ふ疑問が切りに湧いて來た、一個無學の大工が、永久に幾億萬の心に糧を満たすと云ふのは、如何にも奇怪なことだ、僕は耶蘇を知りたくなつたのである。

狩野が一冊の薄い洋書を手にして來た、それは翻譯が新らしくて面白く、受け取つて見ると、『二十世紀新約全書』と金文字で記してある。

狩野は『如何したね』とでも言ひたげに微笑みながら僕の顔を見て居る。

『有難う』と僕は直ぐさま我が別室に歸つた。

机の塵を奇麗に拭ひ、僕は座布団を除けて、端座した。

机上の書に對して、僕は先づ萬感の湧き出づるを制へることが出来なかつた。

古來世界の大家が必生の筆に成りたる書物、何千萬巻とも知れなからう、其れが今ま

何處に在るか、僅に残存するものは、古瓦古錢古器物と同じ意味の價値を以て、圖書

館の塵の底に埋もれて居るに過ぎない、其れは既に思想では無くして只だ古紙である

今日、此の小さな日本のみにて日々出版される新しき書物でも恐らく何萬巻と云ふ莫

大なものである、何れも一世の學者先生の血を絞つたものだ、が、果して幾月の生命

を保つことが出来るだらう。

僕自身も筆を以て立つものだ、歴山大王や、シーザルや、クロムウエルの成したる大

業を、一本の筆にて成就しようとの大勇猛心を以て新聞社の門をクヰつたものだ、爾

來筆を禿にしたこと何百本、原稿紙を費消したこと何千枚、大文章、小文章、幾百

幾千篇と言ふ數を知らない、——其れが如何した、今夜印刷されて明朝直に反古とな

つて仕舞ふのだ、果敢なきものは英雄の事業と罵つたが、去らば記者の事業は何と評

して可いのであるか、僕は斯く自分の餘りの愚昧と餘りの傲慢を嘲らずには居られな

かつた。

眼を開いて見ると、机の上の薄つべらな聖書——是れを透ふして永遠に活動する

耶穌の奇怪。

さながら伏魔殿の扉の前に立つた如く、僕は先づ手を觸れることを怖はく感じた。

ばし黙つて睨んで居た。

第十九

見よ、使者を一人汝の前に遣はす、彼が汝の道開きをするのだ。

「御主人が御座るぞ、道普請だぞやい」と大きな聲で野に叫ぶ、

と、昔時豫言者イザヤが言ふて居るが、其の通り、洗禮のヨハネが愈々野に現はれ

て、罪の赦免の悔改の洗禮を怒鳴り出した、ユダヤ全國、エルサレムの町の者まで

も皆なゾロ／＼と出掛けて、自分の罪を懺悔してはヨルダンの河水で洗つて貰ふ、

ヨハネは駱駝の毛衣に革の帶と云ふ装で、蝗と野蜜で生きて居た、

ヨハネは「今に己よりも豪い奴が来るぞ、己なんか其奴の草履取にもなれりやしな

い、己は水で貴様達を洗つて遣るんだが、今度来る奴は、靈氣で洗つて呉れるんだ」

と言ふて居たが、其時耶穌はガリラヤのナザレ村からやつて来て、ヨルダンでヨハ

ネに洗つて貰つた、水から上がつた時、見ると、天が開いて聖靈が丁度鳩のように

頭の上に降つて来る、天の上に聲がする、「可愛や、忤、嬉れしいぞ」

直ぐと聖靈は耶穌を又た野へ連れ出した、四十日四十夜と云ふもの、惡魔に試験さ

れた、天の使者達に護られて、耶穌は野獸の中に暮らしたのである、

卷を開くと馬可傳の第一章、僕は之を讀んで、何か天外の聲に打たれたように驚いた

以前ならば只だ一笑に付し去つて仕舞つたに相違ない、其れが是まで會て見たことの

無い大文字として此の心を打つた、二章三章と僕は恰かも何物かに逐いやられるよう

に先きへ／＼と讀み進んだ、一字の奥、一句の裏、悉く何か深遠の意味が含蓄され潜

伏して居るとのみ感じられて、肉は動く胸は踊る、呼吸を殺して只だ先きへ／＼と進

んだ、

耶穌は遂に十字架の上に死んで仕舞つた、耶穌の死を讀んだ時、彼の死刑を教唆し、

煽動したものは、パリサイの徒でも、サドカイの徒でも無くして、實に僕自身である

ように驚いた、耶穌を殺したことよりも、耶穌を殺せば自分等が生さると思つたこと

の愚かさに戦慄した、

偕て馬可傳一卷を讀み了つて、「耶穌の何物」と云ふことを考えた時、僕は只だ真に大

洋の真中に置き去りにされた幼児のように感じたのである。只だ廣い。只だ大さう。顧みて、自分と云ふものが餘りに卑吝な小いらうと云ふことを思ふ。が、如何したらば可いか、解らない。

「耶蘇の愛と耶蘇の力」——其れを思ふと、僕は恰も深き谷の彼岸に大伽藍を望むが如く、目には見ながら、辿るべき小徑をすら知らない時の重もき恨に壓へられた。

熟と考えて居る中に、最初の第一章が浮んで来た。駱駝の毛衣を纏ふた葉岩のヨハネ其前に立つて罪の洗濯を求めた耶蘇。——「耶蘇の罪」是れが僕の疑問となつた

又た第一章を読み返へした。「四十日四十夜、悪魔に試験された」と云ふ一句。僕は此の一句の上に良久冥想を凝らしたが、雲烟漠々として何の目に留まるものも無い、僕は疲れた、僕は殆ど絶望した。

自ら叱つて僕は第二巻に移つた——馬太傳。

第一章の耶蘇の系圖、其れから處女マリアの懷妊——是れは僕に取つて初對面で

は無い、僕が會て耶蘇教嘲弄の材料を獵る爲めに聖書を読んだ時、僕は實に此の一章にて充分目的を達したと思つた、僕の見た聖書には此の馬太傳が巻頭にあつた、

耶蘇教嘲弄の聲が僕の胸底に復活した、見もせぬ耶蘇に對する輕蔑の久しき心が、其の頭を持ち上げて、眞面目に耶蘇を求めようとした一時の弱き迷信を、大口開いて笑ふ。

僕は身心の碎けるのを覺えた、僕は最早讀みつゞける勇氣を持たなかつた、僕は聲の上へ仰向きに寐ころんで、目を閉ぢた、何だか厭になつて仕舞ふ、種々の邪念が目に見える、

何にかシダたか打たれたらしく、ビクリと驚いて目を覺ました。又た起き返つて書物に向つた、

鞭ちく／＼讀んで行くと、ヨハネが出て来た。「悔改めよ。天の王國は其處だぞ」と大音聲に呼はりながらヨルダンの河邊に現はれた、僕は如何にもヨハネが氣に入つた、彼

が出て来たので僕の疲れた心は、夕立の雨に浴びたる夏草のように活き返つた。駱駝の毛衣に革の帯、罪の洗淨を受けに来たパリサイやサドカイの高慢ちきな奴等を睨まへて、『此の蚊の一族、去らば貴様等の生活で悔悟の證據を見せて見よ』と叱つた様子が、雷のように響く、耶穌が来た、耶穌が洗禮を受けた、洗禮を受けた耶穌が荒野へ行く―悪魔の試験。

僕は襟かき合はせた。

借て耶穌は聖靈に連れ出されて、荒野の真中で悪魔の試験を受けることになつた。四十日四十夜の絶食で彼も到頭餓へて仕舞つた、試験の先生が現はれた。

『如何じや、貴様が神の悴と云ふなら、其處らに深山石がある、麵包になれと言ふて見ろ』

が、耶穌は答えた、『人は麵包で生きてるじや無い、是非、神様の口から出た仰せに依るのだと、聖書に書いて御座りまする』

そこで悪魔は、あらたかな宮城へ耶穌を引つ張つて、御殿の屋根で問ひ掛けた、『如何ぢや、貴様が神の悴と云ふなら、此處から一番飛んで見ろ。神は汝の足の地に着かぬ中に、使者を出して受け留めて呉れると、聖書に書いてあるぢや無いか』

『神様を試めすなと云ふことも、聖書に書いてありませう』と耶穌は答えた。

三度目に悪魔は愈々高山の絶頂へ引つ張り上げて、世界の國々、其の廣大な様子を盡く指し示し、『さあ如何じや、乃公の前に頭を下げて隨身するに於ては、此の目に見ゆる者を皆んな貴様に呉れて遣るんだが』

『退かれ、不禮漢』と耶穌は怒鳴つた『神様に従ひ、只だ神様を拜がめと、聖書に在るを知らないか』

耶穌を捨てばかして悪魔は姿を隠した、天の使達が給仕に来た。

僕はヂツと考えて居たが然うだ、是れだと、覺えず、机を叩いた。

此の三大敵に打ち勝つた耶蘇は、即ち人生の勝利者だ、此の大勝利者にして始めて『愛』が説けるのだ、  
 此の勝利の耶蘇を眼頭に置いて、更に読み進んだ、僕は實にスラ／＼と之を読みつた、何の疑義も無く之を読み了ることが出来た、胸がスキ／＼した、霧が晴れて、山が見えた、  
 僕は不圖、先年或る耶蘇教の雑誌が、社會主義の衣食問題を陋劣だと攻撃したのに対して、冷評の一文を新聞に載せたことを思ひ出した、

「野百合を見よ、如何して育たつか、別に働かもしなけりや糸も取らない、が、聴きなさい、ソロモン大王の全盛時代などと言つた所で、所詮此の花の一輪だけの色もあつたものぢや無い、——だから、如何したら食へようの、如何したら飲めようの如何したら寒さが凌げようのと、ツマらないことを心配するな、そんなことは皆んな天の老爺が先刻承知だ、先可いから老爺の國と、老爺の好きな正義と言ふ奴と

尋ねるのだ、然うすりや君等の欲しいものも自然付いて来る勘定だ、——」

此の一節を引つ張つて来て、其の耶蘇教の記者は、「社會主義の連中は、物質主義で、神の愛と云ふことを知らないから、只だ麵包の分配ばかり、ガミ／＼言ふ」と非難したのである、何を生意氣なと僕はグイと頬に障つたから「吾人不幸にして二十世紀の科學時代に生れしが爲めに、六日に世界を捏造せる神様てふ恰細工屋を崇拜する迷信の光榮を有すること能はずと雖も、伏して惟るに、公等の所謂神の國とは外國傳道會社の誤聞にして、所謂正義とは金のある信者の靴の紐を結ぶの思ひ違ひに非るなきを得んや」と云ふようなことを書き拂つて、頗る喝采を得た、實に汗の出る話だが、併し耶蘇を知らず、耶蘇の福音を知らない一點は、彼の教會の神學先生と無神論の僕と何の相違も無かつた、彼の教會の先生は、窄き門から入れと耶蘇が言ふたのを聴かすして、廣き此世の物慾の大道から、一毛の悔改も經ずに乗ら込んだ連中だ、だから何方へでも、麵包のある所に頭を下げる、讚美歌を歌つたり、祈禱をしたりさへすれば

其れで聖き身になれるものと思つて、皆な神を試みて居る、皆な悪魔の前に平身低頭して、此世の権力榮華に戀ひ焦れて居る、彼等も預言者の碑を建てる偽善者だ、羅馬皇帝の劔に媚びて耶蘇を十字架に懸けたパリサイの輩とは、即ち今日の教會の先生達のことだ、

斯う思ふと共に、僕等が全く自分の狭い量見で耶蘇を量り、且つ之を嘲り罵つたのが如何にも耻づかしいのであつた、耶蘇も矢張時の権力階級に附屬して、貧民や弱者を『神』の看板で制へつけるもの、ように見て居たが、是れは必竟今の教會を直に耶蘇の精神と見て取つたからの誤解である、耶蘇のは権力や階級や、凡て地上の慾望に戦ひ勝つた上の仕事だ、僕等のは権力や階級や凡て地上の慾望に囚はれて居ながらの嫉妬憎悪だ、及びも付かぬ懸隔だ、

「あゝ、あゝ」と僕は只だ歎息の聲を洩らすの外、何の分別も付かなかつた、

第二十

が、何時となく海明が射して来たような氣がする、聊か手掛りが出来たような氣がする、『故郷』と云ふような温かい感じが腹の底に動く、僕は只だ一心不亂に讀んだ、讀んでは考え、考へては讀む、此の一舉に生命の大根を攫んで仕舞はねばならぬと云ふ意氣込み、食事の時間も惜しい、寐る時間も惜しい、僕は眞に目を忘れて居た、

狩野の父が一寸歸つたさうだ、夜に歸つて、翌朝直ぐ行つて仕舞つたのださうだ、僕は見もしなかつた、四日の日に鶴代さんは三里ばかり距てた姉さん（松代さんと云ふて狩野の直ぐの妹）の嫁入り先さへ遊びに行つたさうだが、僕は知らなかつた、鶴代さんのことなどは、もう悉皆忘れて居たのだ、

五日の朝、狩野は二三日親類を年禮廻りして来るからと出掛けたが、出掛ける前、僕



の室へ一寸来て『如何な風に思ふ』と言ふから、僕は斯う答えた

『神を愛すると云ふことは、必竟大乞食になると云ふことらしく思はれる、僕等は皆な「我が物」と云ふ泥棒根性に囚はれて居るので、如何しても神の顔を見ることが出来ぬ、此の泥棒根性を打ち破つて仕舞ひさへすれば、天空快濶光明赫灼で、父の靈と我が靈とビタリ顔を合はすことが出来るのだ、當面の問題は神では無くして悪魔だ、天國の會食では無くして荒野の試験だ、破壊だ、破壊だ、破壊だ、牢獄の破壊だ』

狩野は熱心に聽いて居たが、『愉快、々々、早く歸つて聽かう』と出て行つた、鶴代さんが居なくなつた、狩野が居なくなつた、お母さんが嘸ぞ寂びしいことだろうから、少こし行つて慰めようとも思つたが、なか／＼お母さん所のことでも無い、一と息に悪魔を平らげてやらねばならぬと、又た北風の机に向つて冥想を凝らして居ると障子が明いた、君代さんが奇麗に化粧つて入つて來た、

『此頃は、石田さん、大變な御勉強ね』と嫣然と滴るばかりに笑を洩らしながら、机

の側にビタリと坐つた、香油か香水か何か知らぬが、甘いような香が、高く腦を打つ僕は覺えず心の底から碎けるばかりに打ち慄へた、

『折角のお正月も、斯様山の中では仕様がありませんのね』と、君代さんは覗くように見る、

『否や、僕は何處に居ても同じものです』と其の媚を含んだ眼を避けた、

『でも、多勢して歌留多など遊ばすんでせう』

『否や、彼様ことは嫌いです』

話の緒が切れた、僕は固くなつて机の木目を睨んで居たが、ゾク／＼と不安の氣に襲はれて仕方が無い、で、僕は『どうも此頃は、飛んだ御迷惑をお掛け申して、何とも申譯がありません』と一生懸命に言つた、

『何です、御迷惑なんて、ちつとも存じませぬよ』と君代さんは不思議そうに問ふ、

『鶴代さんのことに就きまして』

「あ、お婿さんのことですか」と君代さんは、平氣に笑ふ「本當に妹つたら、ヒドいことを申すので御座いますよ、其様に石田さんが御氣に召したら、私に下ださるよりも、姉さんが御自分の旦那様になさる方が可いじやありませんか、——」

「石田さん、餘まり然う氣をお詰めなさるとお毒ですよ、お顔だつて其様に蒼く、目に見えてお憔悴なすつたんですもの、上州へ少こし行つて居た爲めに此様に瘦せたなんて、誰か又御心配なさると大變じやありませんか、其れにお髭が延びましたので餘計に病人々々なさるんですよ、理髪屋が無いから可かせんけれど、私、剃つて上げませう」

言ひながら君代さんは立つた。

「否や、止して下さい」と僕は驚いて留めた。

「可いじやありませんか、私、上手ですよ」と障子に手を掛けて振り向いて微笑む、

「否や、可して下さい、何卒止して下さい」と僕は切りに言ふた。

「ほんとに貴郎も剛情ね、じや、能くお顔を御覽遊ばせよ」と、君代さんは遠棚の鏡を取りに行く。

僕は机の上に腕を組んで、心の褶えを堪えて居る。

「さ、御覽遊ばせ」と言ひながら、君代さんは僕の左側に無理に膝突き並べて坐つた

「ね、お髭が延びましたでせう」  
斯う言ひながら君代さんは、顔すり寄せる「さ、石田さん、御覽遊ばせよ」  
仕方が無いから、恐るゝ僕は面を上げた、蒼い面に血走つた眼の我が影よりも、君代さんの顔の方が先づ目に入つた。

「ね、御覽なさいませ、彼様にお髭が延びたでせう」と言ひながら、君代さんの髭が僕の耳に觸はるまでに摺りつけた。

同時に鏡の君代さんは唇に品を造つて嫣然と笑つた、目縁が美しく紅を潮した。

僕は全身の悪寒に打たれたので、眼を冥つて顔を隠した。

『如何なすつて？ 石田さん』と言ふ君代さんの呼吸は火のようであつた。

『お願ですから、退いて下さい』と言つた僕の聲は戦へて居た。

『何故です、石田さん、お邪魔？』

『否や、然うじやありません、僕が謝罪しなければりやならぬことがあるんです』

『謝罪つて、誰に？』

『貴女に、だから何卒退いて下さい』

『私は貴郎に謝罪して戴く覺が無いわ、何です、石田さん、』

『否や、在るんです、在るんです』

『じや、何ですか、話して下さいな』

『話します、話しますから何卒退いて下さい』

『是れで可いんですか』と君代さんは一寸膝下つた。

『否や、其れんばかりじや駄目です、遠く退いて下さい』

『若様は、お六ヶしいことね』と笑いながら君代さんは、立つて元の机の横へ坐り直はして『此なら可いでせう』

僕は眼を開いたが、身は宛然火焰の底に投げられたようだ。

『さ、石田さん、話して下さい、何時私に謝罪しなけりやならぬようなことを爲しましたか』

『いや、僕は貴女を辱めたのです』と言つたが、舌が乾いて動かなかつた。

『私はチツとも覺がありませんよ』

『無論貴女に覺えのおありなさる筈がありません』

『其れでは辱めたも、謝罪するも、何も無いじやありませんか』と君代さんは微笑む

『貴女は御關係の無いことですから、私の心にはあるのです』

『だから、其れを早く聽かして下さいと申すじやありませんか』

『では、打ち明けて申し上げます』と僕は姿勢を正だして全力を籠めた『實に相済さん  
 ことですが、僕は是れまで長く貴女を姦淫したのです』  
 言ひつゝ僕は君代さんの顔を睨んだ、

『厭な、何ですつて？』と君代さんも真赤な顔をした、

『僕は心に貴女を姦淫して居たんです、だから、白状して御詫しなれば、苦しくて  
 堪まらんです』

君代さんは瞬きもせず僕の面を見つめて居たが『謝罪々々つて、石田さん、只だ其  
 れだけのこと？』

『然うです』と言ひつゝ見ると、君代さんの眼の色が厭な光を浮べて来た、デリッ  
 と電氣のような恐ろしい力が迫つて来る、

『では、石田さん、私も申さなけりやなりません』と君代さんは膝を進めた、

『何です』と言ひながら、僕は覺えず立ち上がった、

君代さんの手が羽織の紐に觸れた、ブツリと音して「チ」が切れた、

『何をなさる』と突きのけたが、君代さんは目にも唇にも焔を吹いて最早全く狂亂の  
 體だ、蛇の如くに纏はりつく、拂い退けくつゝ僕は三廻りばかりも室の中を逃げ廻  
 はつたが、所詮かなはぬと思つたので、力限りに壁ぎはに突き倒はし、其の起さ上  
 ろうとする頭上へ羽織を脱いで投げつけた、僕は逸散に障子を開けて縁へ出た、  
 中には泣き倒はれる聲がした、

## 第二十一

僕は庭下駄を穿いて、雪の固まつた上を、ガリ〜と齒の痕をつけながら、彼方此方  
 歩いて見た、

頭が次第に冷へて来た、心が次第に鎮まつて来た、で、又た室へ立ち返つた、  
 君代さんは羽織に顔を押しあて、室の真中に泣き伏したまゝである、

僕は其の傍に正坐して『さ、お顔をお上げなさい、お上げなさい』と言ふて見たが、返事が無い、只だ泣きしやくりをして居る。

『如何なすつたんです』と僕は少しく聲を荒らげてグイと抱き起したが、矢張羽織を顔に當て、居て放さない、羽織を取らうとしても、一生懸命に押えて居て放さない『之をお放しなさい、少くし申上げたいことがありますから』と言つたが、なかく放さない。

『何卒此儘に捨て、置いて下下さいまし、種々して下ださると、又た煩惱が起つて、如何な狂つた真似をするかも知れませんが、私は最早二度と此世の人の顔を見ること出来ぬ身で御座います、此の御羽織は貴郎が投げて下さつたので、御座いますから私は何處までも貴郎だと思つて、此儘此の室で死んで仕舞います、居て下ださると迷の上の迷です、どうせ生き甲斐の無い廢女の私のことですから、斯うして死ねば本望で御座います』

『お死になさるのをお留め申すのじや無いです、欲しければ何でも差上げませう、斯様直ぐ朽ちて仕舞ふもので無く、裂けも破れも朽ちもしないものを上げませう、だから、羽織はお放しなさい』

『厭です〜』と君代さんは首を振る『貴郎はお欺ましなされるから厭です、欺ました後でお笑ひなさるから厭です』

『僕は決して嘘は言ひません』と叱るやうに言つた。

『じや、何を下下さいますの？』

『物は僕の隨意です、何を差上げたいにも、貴女が然うして居なすつては仕様が無いじやありませんか』

言ひながら僕は羽織を引つ張つた、羽織はズル〜と抜けて来た。

君代さんは両手に濡れた顔を押へて居る、前髪だの、髪だの、亂れたのが、涙で顔中へノタつて居る。

僕は心にイヂらしさを覺えた。

僕は自分の悪るかつたことを詫びた、お互に此の恐るしき罪に打ち勝つて清潔の心に立ち返へらねばならぬことを説いた、が、君代さんは承知しない、

「貴郎の今更遣ると仰つたのは其様ものですか、私は其様御説法ぐらひで満足するものじやありません、私は堪えて居たのです、貴郎の奥さんになれる身では無し、ヂツと堪えて居たのです、其れを貴郎が彼様こと仰つて、私の心を亂してお仕舞なすつたぢやありませんか、迷つたのは私の罪ですけど、お亂しなすつたのは貴郎が悪るいのです、其様御説法なら私でも知つて居ます」

手を放して上げた顔を見ると、憤怒の焰が野火のように燃えて居る、  
「鶴代にまで悟られて居るのですもの、私は最早構ひません、貴郎の御迷惑は知つて居ります、ですけれど斯様に亂してお仕舞ひなすつたのは貴郎ですもの、貴郎も是れまでの運命と斷念めて、私と一所に死んで下下さいまし」

言ひながら君代さんは又た飛びついた、僕は其の双の手首をシカと攫んで睨らまへた  
「可し、貴女は本當に此の石田省吾とお死になさるか、本當に此の石田省吾に殺させな  
さるか」

「さあ、何卒殺して下さい、さあ、何卒殺して下さい、其の代はり貴郎も一所に  
死んで下下さらなけりや厭です」

「死にませう、では之をお受けなさい」

「は——」と言ひながら何氣なく見上げる君代さんの左の頬を、ピシーリと力まかせ  
に平掌で殴つた。

喫驚した目にテラと怒氣の閃いたが、僕が鬼のやうに睨みつけたので、目を閉ぢて俯  
いた、

「是れが愛ですぞ」と又た殴つた、君代さんは眉を蹙めて、唇を噛んで、ヂツと堪え  
て居る、最後の一撃、又た殴つた、

頬は眞赤になつた、固く閉ぢたる臉を溢れて、涙が瀧のように落ちる。僕は心に神を念じて、見つめた、無言で相對すること、多時、

やがて君代さんはグタ／＼に碎けて泣き崩れて仕舞つた、

午後にお母さんの室へ行くと、お母さんは眼鏡を掛けて繪本の釋迦入相記を見て居られた、『僕が讀んで上げませう』と言ふと、『然うですか』と眼鏡をハツされた、曾て修業した朗讀法を久振りに應用して僕は讀んだ、丁度釋迦が妻子珍寶及王位を捨て、山に入るの所であつた、釋迦が愈々山に入つて仕舞つたので、『さあ、石田さん、何卒、お休み下さい』と、お母さんは言はれた、お母さんは眼に涙を湛めて居られた、僕は世間の父母が皆な釋迦の親と同じく、地上の間違つた考の爲めに、苦勞して其子を邪道に引き入れようとして居ることを話した所が、お母さんは『本當に仰しやる通りで、私も漸く解つて参りました』と、シミ／＼肯かれた、

お茶の御馳走になつて別室へ戻つて見ると、何時の間にか羽織の綻びを縫つて、チャんと疊んで片寄せてあつた、僕は泣いた、

僕の心は東京へ行くのを無暗に急ぐのである、新聞社の方を片付けて、一刻も早く我が新生涯に入らねばならぬと焦立つのである、早く狩野が歸つて來れば可い、狩野の顔を見たら直ぐにも立たうと考えて居た、

翌日の宵である、僕は過ぎ來し方、行く末、自分のと、他人のこと、天のこと、地のこと、彼から此れ、此れから彼れと考えながら歩いて居ると、女の若かい聲がする、目を上げて見ると、井戸端に赤ん坊を背負ふて菊野さんが立つて居るのだ、天には眞圓な月がある、仰向いた顔を月の光が隈なく照らして居る、菊野さんは肩をユスぶりながら小聲に守歌を誦して居る、

僕は袖垣の蔭に呼吸を殺して立ち留つた、

菊野さんは又た歌ふ

お月さま出て

お父さま留守で

坊のお家は闇だ

お父さまは何處で

坊の顔思ふて

お月さま見て御座る、

歌い了つて菊野さんは、其の奇麗な目を上げて、ヂツと月を眺めて居たが、やがて背中を振り向いて『坊やは寝んねしたかや』と言ふ、最早寝んねしたのであらう、菊野

さんは家の方へ足を向けた

早く坊やに良い嫁女とつて、

揃ろて田圃へ出て見たや、

と節廻はしよく歌ひながら、僕の隠れて居る袖垣に手をバラ／＼と觸れて行つた、良人と子との爲めに一身を忘れて居る、美しくき女の心を思ふて、僕はヂツと見送つて居た、

第二十二

狩野が歸つて来たので、僕が直ぐに出立すると言ふと、皆んな驚いた、十五六日頃までは厄介になると云ふ豫定であつたのが、十日にもならないのに立つと云ふのだから皆な不審がる、狩野の如きは怒るやうに留めたが、『早く行つて東京の始末をして仕舞はねばならぬ、然る後改めて来る、改めて是非来る』と僕が言ふたので、皆んなも黙



つて仕舞つた。

「留守の中に、濱さんから手紙が来て居た」と狩野が持つて来た、狩野への手紙の中へ、僕のも封じて来たのだ。

狩野への手紙には「先日は圖らずお目にかゝり、親御様との段々のお話を承りて、自分も深く考えた」と云ふだけのことを書いてあつたが、僕へには「昨冬あなた様にお目に掛りてより昔のこと思ひ出で、此心千々にかき亂れて居候所へ、孝一様には思はぬ御面會を遂げ、淺猿しき一身捨てるにも捨てられず、死ぬるにも死なれず、人は春だの正月だのと樂しげに興じ居れども、我身は恰も空蟬の抜殻のようにて、只だ思ひ出してはシク〜と泣いてばかり居り候、歸途に必ず立ち寄つてやると仰せられし御一言を力草に、御待申上候、何時頃御歸京の御思召にや、せめて御日取なりとも御知らせ下されたたく〜」と云ふような意味が細々と認めてあつた。望遠鏡にて遠き敵陣を伺つて居る胸元へ、突然短銃をつき付けられたやうに、僕は愕

然と驚いた。

狩野も黙つて讀んで居たが、「君、何と思ふ」と問ふ。

僕は冥目して我が心の騒ぎを押し鎮めた、澁川は僕の難關となつた、立ち寄れば何となく捕はれそふ思がする、素通りにすれば大敗北だ、僕は暫ばし黙靜に沈んで居たが、やがて面を上げて、「僕は必ず彼女を救ふ」と斷言した。

狩野は無言に肯いて居た。

其夜彼の奥座敷に於て、僕の爲めに會食の催があつた。

行つて見ると、膳が五脚並べてある、勧められるまゝに僕は正面の床柱の前に坐つたお母さんと狩野が、左右に向き合つて坐つた、尚ほ二脚の空膳がある、一つは君代さんのだ、が、今一膳は誰のであらう、斯様なこと考えながら、二人と彼此話して居ると、次の間で、誰か切りに争ふ聲がする、「まゐ、何だね、其様など言つて」と言ふのは君代さんだ、お母さんも狩野も同じく不審げに目を注いだ。

幼児が泣く、「それ御覽よ、坊やが目を覚ますぢや無いかね」と君代さんの聲と共に襖が開いた、幼児を左に抱いた菊野さんが、右手を君代さんに引つ張られながら、眞赤になつて鬨ぎはにウツクまる、

「厭な菊野さんね、貴女のお膳が待つてるぢやありませんか」と君代さんは微笑ながら、無理に引き立て、狩野の横へ菊野さんを座はらせた、

菊野さんは消え入りたげに小さいさくなつて座つて居る、狩野は兩手を膝にして、目を閉ぢて俯いた、お母さんを見ると、袖口に密と涙を押えて居なざる、僕も驚いた、

「今晚は私がお給仕で御座いますから、何卒皆さん、澤山に召しあがつて下さい」と、君代さんは獨りで嬉しげに莞爾して居る、

今夜の君代さんは非常な質素である、僕は實に高貴く美しくしき婦人と君代さんを見た箸を取らうとすると、「一寸、僕が祈禱をしたいから」と狩野が言ふ、

一同、手を膝にして目を閉ぢた、

「天の父様」と言つたが、狩野は最早泣いて居る、言葉が綴れない、二たび三たび「天の父様」と言ひ直ほして、涙呑み込み呑み込みして祈禱を續けた、彼は己の罪の爲めに祈つた、父の爲めに祈つた、母の爲めに祈つた、姉の爲め妹の爲め、妻子の爲めに祈つた、又た僕の爲めに熱情を注いで祈つて呉れた、

彼れの祈禱は了つたが一人も面を上げるものが無い、皆な泣いて居て面を上げるものが無い、やがて涙を拭いて身を起したが、何れの面も皆な炬を出でたる眞鍮の如く、眞赤に美しく輝いて居た、坊やのみは安らかにスヤ／＼と母の腕に眠つて居た、

翠朝 僕は門の前にて一同に別れを告げて出發した、狩野は吾妻橋まで送ると云ふので一所に出た、丁度半月前の夕暮に上ぼつて來た坂を下りて例の渡船場指して急ぐのである、雪がチラ／＼と舞ふ、

狩野は姉の心の激變に驚いて居た、狩野は話に依れば、昨夜僕が室へ歸つた後で、君

代さんは狩野と菊野さんの前に手を突いて、是れまでの自分の心得違を詫び、且つ愈々狩野夫婦が父と分れて小さいな獨立をする節は、是非自分をも一所に連れて行つて呉れるように頼んだと云ふことだ、何せよ狩野は君代さんの心の激變を驚き怪しんで居た、僕は心の燃えるように覺えたが、押えて黙つて居た、渡船場に着いた、狩野は渡守の小家へ行く、僕は汀の砂の上は、河面を眺めて待つて居た、雪が次第に降つて来る、其の上になり下になり、衝突つたり別れたりして落ちて来る奇麗な雪片が、蒼き河浪に溶けて流れる様を見て居ると、人の生命のやがて神の靈に溶けて活きる様が偲ばれるようだ、

渡守が狩野と話しながら来た、砂の上に寝て居る舟を、水の中へ押し遣る、僕は不圖先夜の青年のことを思ひ出した、毎朝此の舟で彼岸の林檎畑を見舞いに行く、林檎が嬉しげにお早う／＼と挨拶すると言ふた青年の談話を思ひ出した、然うだ、神は雲の上に居るのでも無い、風の中に居るのでも無い、此の心の奥の神の眼が醒めたならば

凡ての物に神の面影を見ることが出来るに相違無い、其時で無ければ、誠の兄弟の愛を言ふことは出来ない、考えた、輕羅一重の外に暖き光を薄く見ながら、僕は言ひ知れぬ寂しさに打たれた、

舟が装はれたので僕等は乗り移つた、渡守が腰に力を入れて一と手繰り綱を引かうとする時、『待つてお呉んなせい、待つてお呉んなせい』と云ふ女の聲がする、聴いた聲だと思ふ時、狩野は『や』と言ひながら舟縁から腰を上げた、菊野さんが松林の中を逸散に走つて来るのである、

渡守は手を止めた、

『如何した、如何した』と狩野は言ふ、

『あの、是れを石田さまに——』と言ひながら菊野さんは、息を切つて、汀に走つて来た、手に御納戸縮緬の小さく疊んだのを持つて居る、

『石田君に如何したんだ』と狩野は言ふ、

「若奥様が」と菊野さんは言ひかけたが、フと口に手を當てた「あの、お姉様が、雪が降り出したで、石田様にお頸へ巻いて行つて下下さいませようにつて」

「然うか、御苦勞〜」と狩野は言つた。

「御姉様も一所に走けて來なさいましたけれど、舟が出て仕舞ふと可けないで、早く飛んで行つて呉れて仰いやしたので」

菊野さんは面を赤くして呼吸をハツませて居る。

僕は氣の毒だとは思つたが、躊躇した。

「第一のお布施だ、受けて遣り給へ」と狩野が僕は押り返つたので、僕は獨り舟を下りた。

僕が菊野さんから受けて、其の疊んであるのを、解いて居る時、松の間に君代さんの顔が白く見えた。

僕は砂利を踐んでスタ〜と急いだ。

走けたりなどと、慣れないことをしたので、君代さんは面を蒼くして死ぬるような呼吸づかいである、途中で顛ひでもしたのであらう、上着の膝に土が付いて居る。

「御心配下だすつて有難う」と言ひながら僕は右手を出した。

君代さんは倒れるように僕の手に捉かまつた。

「昨晚のことは、狩野君から聴きました」と、僕は彼女の面を見つめたが、君代さんは未だ物が言へない、両手で緊と僕の手を握つたまゝ、ハラ〜と熱い涙をこぼした、前髪にタマつた雪が、揺れて散つた。

僕は扶けて静に汀まで連れて來た。

「折角の御厚意ですから頂戴して参ります」と、僕は縮緬を長く解いて、顔から頸からギリ〜巻きつけた。

「其様もの、お厭でせうけれど、路傍の乞食にでもお遣り下さいませし」と言ひながら、君代さんはデット見て居るのであつた。

僕は二女に一禮して再び舟に上つた、  
 ビンバン／＼と鐵線の鳴る下を、舟は浪を切つて彼岸へ／＼と寄る。傘を無しに立つ  
 二女の姿が、雪の中に薄く小さいさくなつて行く

明治四十一年七月七日印 刷  
 明治四十一年七月十日發 行

小説定價金三十五錢



著 作 者 木 下 尙 江

發 行 者 東 京 市 本 郷 區 弓 町 二 丁 目 二 番 地 宮 城 伊 兵 衛

印 刷 者 東 京 市 京 橋 區 築 地 三 丁 目 二 番 地 守 岡 功

印 刷 所 東 京 市 京 橋 區 築 地 二 丁 目 廿 一 番 地 株 式 會 社 國 光 社

發 行 所 東 京 市 本 郷 區 弓 町 二 丁 目 二 番 地 振 替 口 座 七 六 七 四 番 昭 文 堂  
 發 賣 元 大 阪 東 區 南 波 邊 町 振 替 二 八 二 三 杉 本 書 店

昭文堂發行圖書特約發賣元

神田表神保町  
振替二七〇

東京堂

京橋尾張町  
振替八六七

東海堂

日本橋住吉町  
振替一七四四

至誠堂

日本橋通油町  
振替三三四二

水野書店

神田裏神保町  
振替三〇八六

上田屋

日本橋吳服町  
振替七五〇

北隆館

本郷一丁目  
振替一七一

東亞堂

名古屋本町  
振替五八〇一

川瀨代助

大阪東區備後町  
振替三三五〇

吉岡寶文館

京都佛光寺烏丸  
振替二六四七

東枝律書房

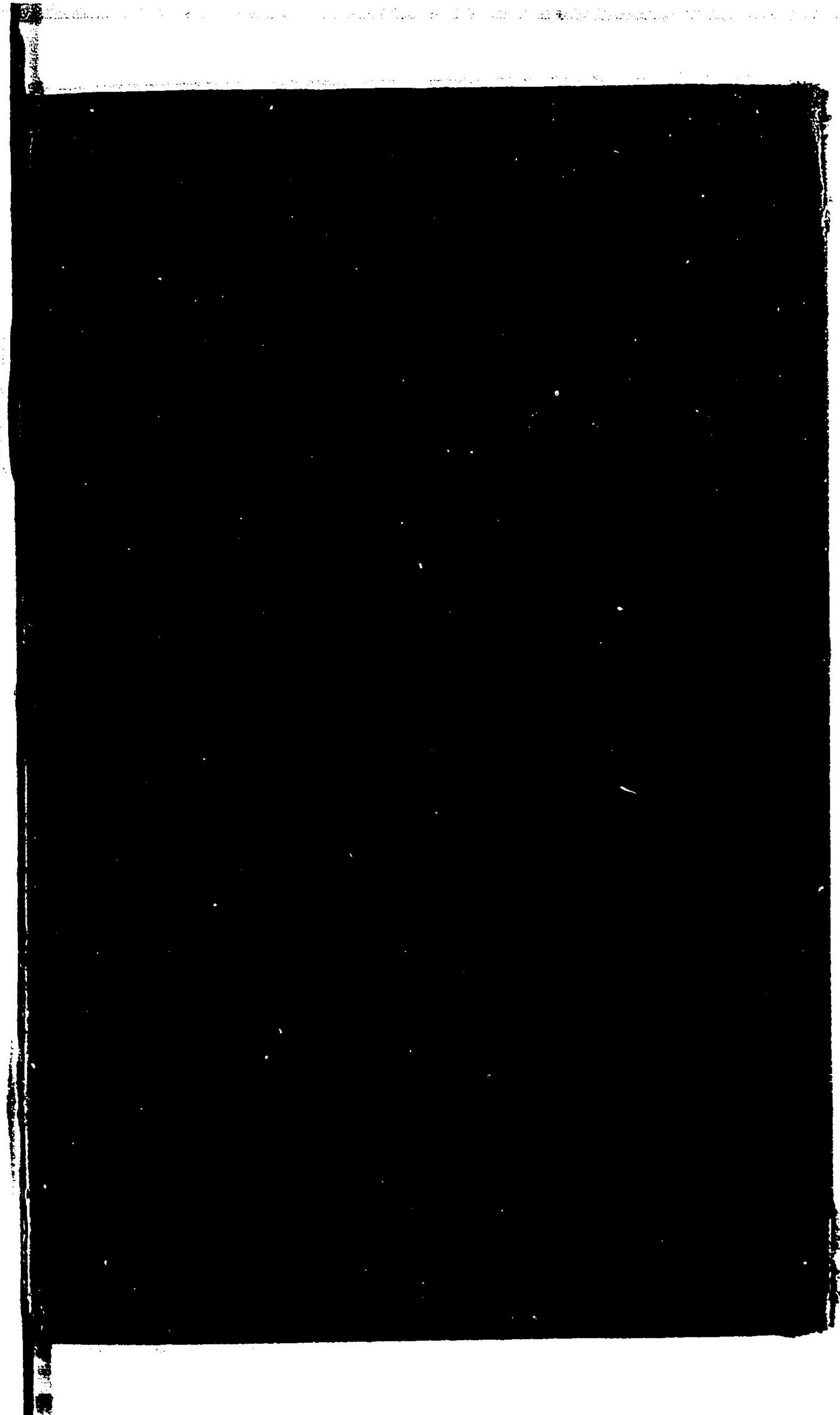
久留米市米屋町  
振替五二九三

菊竹金文堂

大阪東區南渡邊町  
振替二八二三

杉本書店

32  
350





093709-000-9

32-360

乞食

木下 尚江/著

M41

DBQ-1126



